

# TOSAIBOTIMES

2009年2月2日発行

編集者：TOSAIBO TIMES 編集委員会

編集長：生原 勇

発行者：上原 泰男

東京災害ボランティアネットワーク

〒164-0011 中野区中央 5-41-18

東京都生協連会館 3階

tel:03-3380-1614 fax:03-3380-1615

E-mail:office@tosaibo.net

## 震災から14年。思いを新たにー



「阪神・淡路大震災」から14年目を迎えた2009年1月17日、東京都千代田区有楽町の「東京国際フォーラム地上広場」にて、東京災害ボランティアネットワークは「いま、わたしたちに、できること。2009～KOBEMEMORIAL1.17 灯りのつどい～」を開催しました。

2000年から実施している毎年恒例のイベント。2003年からは東京国際フォーラム地上広場を会場としています。東京駅と有楽町駅の間にあり、商業施設も多いこの地域での開催ということもあり、多くの方が素晴らしいハンドベル演奏や無料で配布しているお汁粉炊き出しなどで足を止め、灯りのつどいや防災クイズに参加し「阪神・淡路大震災があった日かあ・・・」と思い出せる機会となりました。イベントに参加することはもちろんですが、少し触れるだけで気づきを得られる取り組みになったのではないのでしょうか。

また、このイベントと平行して、「災害伝言ダイヤル 171」を、この期間に団体内、会社内で体験していただくようなキャンペーンを提案させていただいておりました。いくつもの関係団体・企業の方々がこの提案を引き受け、実施してくださりました。

あの震災から14年。ともすれば慌しい日常の中ではあの災害を忘れがちなわたしたちですが、せめて一年に一度、この1月17日には、家族で、職場で、仲間と共に思い出し、来たるべき東京の災害への備えを新たにしていきたいと思っています。

### いま、わたしたちに、できること 2009 KOBEMEMORIAL 1.17 灯りのつどい

日時：2009年1月17日(土) 16:00～18:00

場所：東京国際フォーラム中庭

内容：灯りのつどい、煙ハウス体験、防災クイズ、ハンドベル演奏、炊き出し(お汁粉)、パネル展示

参加：1200名(ボランティア参加200名含む)

主催：東京災害ボランティアネットワーク

共催：(株)東京国際フォーラム、東京ボランティア・市民活動センター

後援：東京都、ちよだボランティアセンター

協力：日本ハンドベル連盟、玉川学園グリーンハンドベルクワイア、イオン1%クラブ、環境NPOベルデ、丸の内消防署、御管5・6丁目町会、東京都生協連、全労済東京都本部、連合東京、シャンティ国際ボランティア会、東京YMCA

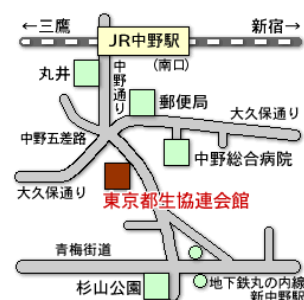


### 東京災害ボランティアネットワーク事務局

〒164-0011 中野区中央 5-41-18 東京都生協連会館 3階

tel:03-3380-1614 fax:03-3380-1615

E-mail:office@tosaibo.net



# 1.17 イベント参加者からの声

## 何ができるか考える「きっかけ」

2009年1月17日、東京国際フォーラム地上広場において開催された「灯りのつどい」に参加しました。10回目となる今回は、会場に、例年のパネル展示コーナー・炊き出し(お汁粉)・煙体験ハウス・防災クイズに加え、スクリーンが設置され、「1.17 KOBE」の灯り・玉川学園グリーンハンドベルクワイアの演奏など会場の様子が映像で映し出されました。

私は「煙ハウス」設置のお手伝いから始め、道行く人へのビラ配り、防災クイズに答えてくれた方へのお土産袋詰めを担当していました。

ビラ配りでは、ビラを受け取っていただき、足を止めていただくことの難しさを今回も痛感しました。初めの声かけが大事だと思うのですが、思うように上手くいきません。運よく耳を傾けていただき、足を向けていただけたときはほっとします。この声かけは、私の内では、「顔の見える関係」を築くための、自身の訓練のようなものです。

防災クイズの、災害用伝言ダイヤル「171」については、知らない方も意外と多く、そのような方には、NTTでは、防災週間や毎月1日に体験利用できる機会があることをお知らせしました。

このイベントを通じて、過去の災害から学んだことや、気づいたことを、これからどのように活かし、何ができるのか、考えるきっかけになる方が増えていけば良いと思います。

今年も皆さんと、多くの犠牲者の冥福を祈ることができました。ありがとうございました。

蛇足かもしれませんが、今年の「パネル展示」と灯りに使用する「ガラスの絵付け」のブースはひとつになっていて、明るい一体感のあるスペースになって良かったと思います。来年の参考にさせていただければ。(連合東京 VSC 厚澤)

## 災害の記憶

今から14年前に起こった阪神淡路大震災。その当時とはとても大きな被害があったけれど、日々時間が経つにつれて忘れ去られていく記憶。

その当時、被災地から遠く離れた東京で小学生だった私も、「大きな地震があった!」という記憶はあるものの、どんな地震だったかなんて曖昧な記憶でしかありません。

現在の神戸は、街並みも震災前とはそれほど変わらない風景が広がっているそうです。14年という月日はそれほどの時間であり、見かけからはそんなことが起こった場所だなんて想像も出来ないようです。

しかし、それまでの隣近所の付き合いや地域のつながりといったものは、未だに回復していないという声も聞かれます。

そんな中、2009年1月17日(土)に東京国際フォーラムで開催された「灯りのつどい」に初めて参加しました。阪神・淡路大震災を思い起こし、大事なことを忘れないためのイベントです。

会場では、炊き出しや煙体験ハウスなどの防災体験があったり、ステージでハンドベルの演奏があったり。辺りが暗くなってから、ろうそくで作った文字が浮かび上がったときには、心にジーンと染み渡る幻想的な風景でした。

辛いことを思い出す必要は無いけれど、そこから得られた気付きや学びを忘れず、今後に活かしていけたら。日頃から防災の心を忘れず、備えをしておくことが肝要である。そんなことを感じさせられた1日でした。(TVAC 宮田)

写真左下: 竹とペットボトルの中にろうそくを入れた灯り文字

写真右下: 通りすがりの方が足を止めて、ハンドベルの演奏を聴いたり灯りを眺めて、あの日を思い起こしていました



## コラム <TOSAIBO TIMES 編集長ハイバラのお言葉>

痴漢の話です。

といっても、痴漢にあったとか、痴漢をしたという話ではありません。私の職場の女性職員から聞いた話です。某日、某私鉄の朝の通勤電車。もちろん満員。突然、女性が「やめてください」と叫んだそうです。すると若い男性の声で「このような満員電車の中でお互いの体が触れる事は仕方のないことでしょう。私は何もしていません。」とはっきりと叫んだそうです。すると今度は近くの女性が、「やめてください」と言った女性に「私の場所とかわかりましょうか?」といったとのこと。

その後のやり取りは良くわからないそうですが、その男性は駅員に引きずり出されることなく、終点で降りたそうです。

もちろん痴漢は卑劣な犯罪ですが、混雑のもたらす偶然が冤罪を生み出す下地になっています。まっすぐ生きることはそんなに難しいことではありませんね。(ハイバラ)



# カンボジアの青い空 ～SVAカンボジア事務所訪問記～

あきこちゃんとこどもたち

今回の旅はベトナムのハノイからプノンペンに入り、その後、アンコールワットのあるシェムリアップからホーチミン、そして帰国という結構長い旅程でした。

ベトナムは思い入れのある国でしたので、一度は行ってみたい国でした。ベトナム戦争関連施設も何箇所か見ました。しかし今度の旅で最も印象に残ったのは、カンボジアでの鈴木あきこちゃんとこどもたちです。

次の日の朝早く、SVAの車両に乗せてもらいシェムリアップ州のサマキというところにある小学校に向かいました。7時間かかります。途中から舗装が途切れ盛大なる砂ほこりとともにサマキに向かいます。その時はカンボジアとタイの国境にある寺院を巡って一触即発の状況で、カンボジアの戦車や装甲車が国境目指して突っ走っていました。

途中、現地で活動しているSVAの車両と行き違いました。「サマキでは食堂がないので、2時間かけて昼食をとりに行くんです」とあきこちゃんは言いました。

サマキ小学校。日本の民間団体によって作られたばかりの小学校です。教室は三つ。ひとつはまだ壁塗りの最中、ひとつはSVAが設置した図書館。校舎の外ではSVAの現地職員による紙芝居が行われていて、こどもたちがあふれていました。校舎には電気はありません。水道也没有。敷地の中に「池」を掘り、雨水を貯め濾過して飲みます。紙芝居が終わるとこどもたちはどっと図書室になだれ込みました。数百冊の絵本の中から一冊を選び、目を凝らして読み始めました。

これらの絵本は、現地スタッフが奥深い村の古老に直接、昔

話を聞き、それを元に絵本を作っているそうです。現地スタッフのマネジメントや総合的な支援があきこちゃんの仕事です。どうです、われらがあきこちゃんはずごいでしょう。

こどもたちの絵本を読む姿、あきこちゃんのうれしそうな顔、「学び」「育てる」原点を見た思いがします。

東災ボのみなさん、鈴木晶子さんが帰国されたら、みんなで話を聞く会を開きましょう。

SVAがんばれ！ あきこちゃんがんばれ！



写真左上：井戸の後ろにある池からポンプで水をくみ上げる。池の水は白濁している

写真右上：SVAが設置した図書館はこどもたちに大人気

写真左下：娯楽が少ないこともあり、こどもたちは紙芝居を心待ちにしているよう

写真右下：青空の下、紙芝居がはじまる

## 内閣府主催「2009年 防災とボランティアのつどい」

### 東災ボが経験報告

今年も「防災とボランティアのつどい」が1月21日、国立オリンピック記念青少年総合センターで開催され、このつどいの中で東災ボは皆さまと共にあった取り組みのいくつかを報告させていただきました。

この「つどい」は、阪神・淡路大震災以降、災害時におけるボランティア活動の重要性が広く認識され、その後閣議決定で1月17日を「防災とボランティアの日」と制定した動きと連動し、毎年各地で開催されています。

本年の「つどい」は、午前中の全体会で昨年発生した岩手・宮城内陸地震の際のボランティア活動および愛知での豪雨災害における地域・企業での支援活動の様子が報告されました。午後の分科会では、テーマごとに三つの分科会に別れおこなわれました。

東災ボは、午後の第一分科会「都市型災害とボランティア活動」で、2008年首都圏統一帰宅困難者対応訓練の取り組みを事務局の福田君が、第三分科会「復興とボランティア活動」で、三宅島復興支援の取り組みを東京都協連の生原氏が、それぞれ報告、課題提起をおこないました。

特に、2000年の発災から長期にわたり関わり続けている三宅島復興支援の取り組みについては、「みやけじま<風の家>」の被災者支援活動と、東京都協連の被災地の農産物と都市消費者をつなげる産業復興支援の一面が報告され、東災ボの多様な側面を報告することができました。

第一分科会の帰宅困難者課題の取り組みも、第三分科会の復興支援活動の取り組みも、具体的な経験と実績を背景とする報告であり、多くの参加者の注目を集める貴重な経験報告として、主催者からも後日高い評価と謝辞をいただきました。



写真上：DVDでの記録映像と共に、これまで取り組んできた三宅島復興支援活動を報告する生原氏

写真下：都市災害特有の課題である帰宅困難者課題への取り組みを報告する福田君

(上原)

# ～三宅島からの便り みやけじまく風の家～ お掃除ボランティア活動と交流

2005年の年末から始まったこの「三宅島年末お掃除ボランティア活動」も2008年で4回目となりました。

2005年2月から8月まで約半年間におよんだ帰島支援ボランティア活動。多くのボランティアの方々に参加していただき、支援する者と支援される者の壁を超えた交流を持つことができました。

2005年10月からは、復興支援として、島民の加齢と島の高齢化課題に取り組む試みとして島民自身が運営する「みやけじまく風の家」を通じて様々な活動を展開しています。

今回の「三宅島年末お掃除ボランティア活動」は、例年通り2週に分けて東京からの参加申込が48名に上りました。残念ながら、1週目については天候不良による東海汽船の欠航で中止となってしまいましたが、2週目については、無事実施することができました。



<参加者の方々からの感想> 参加くださった方々からの感想の抜粋です

◆高いところを中心に清掃作業をした。島民の方と懇談して、避難生活中の苦勞、心勞はとても大変だったことが伝わってきた。私たちボランティアにとっても気遣っていただき、かえって恐縮してしまいました◆入島するたびに島民の方々の顔から笑みを見られるようになったと感じています◆地元の中学生とともに、活動できたことは大変素晴らしいと感じた。また年末の掃除という観点の活動は良かったと思う◆交流会でスタッフの方が言われた『「今日も一日楽しく過ごせた』、ここに来られる方もスタッフもそう思える場にしたい』という言葉が印象的だった◆今回の活動を通じて得られたものを自分の身の回りに伝えて、こうしたボランティア活動への参加者を増やすきっかけになればと感じています◆意識向上を目的とした「スタディツアー」として、今後とも活発な運営を希望します◆今回参加して、多くの島の方々がボランティアとして支えているのがわかり、やはり「人って良い所あるじゃん」と、暗い、イヤなニュースばかりの昨今、明るい心があたたかくなる思いがしました



風の家  
の坂上さん  
からメッセージ  
をいただいています

たくさんの「やさしさ」が交わされた時を共に過ごせたことを、心から嬉しく思います。今回のプログラムを通じて、改めて人と人が出会い良い交流を生むために必要なものは、決して面識などではなく心を込めたまなざしや誠実な心なのだと感じています。みやけじま『風の家』は引き続き、島に暮らす人だけではなく多くの方にとってやさしい家であるよう歩んでまいります。くらす場所はさまざまであっても、今回一緒することができた皆さんと共に、この時代の中で自分と自分以外の人が本当に「やさしく・仲良く」あるためにと、心から願っています。三宅島災害・東京ボランティア支援センター <みやけじま『風の家』> 坂上幸一郎

## 編集後記

## 東京災害ボランティアネットワークとは？

1995年の阪神・淡路大震災を契機に、1998年1月に設立されたボランティアネットワーク。災害救援活動や防災・減災活動、ボランティア団体やNPO団体に限らず、様々な形で様々な課題に向かって活動している団体が、災害前に「顔の見える関係」を構築していくことを目的としている。構成されている団体は、ボランティア団体・NPO団体をはじめ、労働団体、消費者団体、社会福祉団体、海外支援NGO、企業と多岐にわたる。

これまで1998年福島豪雨災害や2000年三宅島噴火災害、2004年新潟水害、新潟県中越地震、2005年三宅島帰島支援など、様々な被災地で被災地支援活動・被災者支援活動を展開。

また、各被災地で気づかされたことを東京での防災・減災活動に生かし、都道府県行政、市区町村行政、社会福祉協議会、企業、そして地域の学校・町会などの地域団体と共に、災害といのちとくらしを想像して、考えて、実践していく小さな「気づき」の取り組みを実施している。

2008年7月現在80の団体が参加。

震災時にトイレはどの程度使えなくなるのか。昨年10月中央防災会議は、首都直下地震での東京23区をモデルに試算した。都内には下水道に汚水管を接続して上に便器を置けばすぐに使えるトイレが3966基あるが、とても足りない場所があるという。特に千代田区は昼間人口が100万にも及び、既存の公衆便所やコンビニのトイレが使えとしても充足率は29.5%だという。また非常用のトイレがあっても実際には和式が多く、04年の中越地震では「洋式にして欲しい」という声が多かったようだ。

思い起こせば14年前の阪神・淡路大震災での避難生活でもトイレの後始末にとっても苦勞したと聞く。避難所になった学校の先生やボランティアが片付けたこともあったようだ。

私たちの生活に欠かせない「トイレ」。昨年東災ボが行った首都圏統一帰島困難者徒歩帰島訓練でもトイレは長蛇の列だった。実際には水も止まり、流すこともできず、トイレトーパーもないかもしれない。

こうした現実的に起こりうる尿の問題をどうするのか、私も都民の一人として、住民レベル、自治体レベル、あらゆる分野で話し合っておく必要があると強く感じた。(真島)